東方學報 京都第 87 册（2012）：486-450 頁

華西系鏡群と五斗米道

森　下　章　司

1　華西系鏡群の年代と生產動向
（1）華西系鏡群の分類
（2）華西系鏡群の年代
（3）華西系鏡群の生產動向
2　五斗米道の動向
3　三段式神仙鏡の圖像世界と道教
（1）三段式神仙鏡の圖像の新解釋
（2）北辰・北斗・斗母と道教信仰
4　三段式神仙鏡の展開
結　語

華西系鏡群とは，後漢末に四川・陝西地域に展開した鏡群のまとまりを指す。その核となる鏡式は三段式神仙鏡である。獨特な圖像を有し，「九子」や「三王」など特徵的な語を銘文にふくむ。三段式神仙鏡と銘文や紋樣に共通性をもつ方銘盤龍鏡・方銘獸紋鏡，盤龍鏡の一形式，環狀乳神獸鏡があり，分布は兩地域に集中する。（森下 2011a）。

この鏡群は他地域の鏡群への影響を與えるなど，後漢鏡生產の動向をとらえる上で重要な位置を占めるが，基本的な分析はなされていない。そこで本稿ではまず三段式神仙鏡を主たる對象として，年代や分布などの考古學的な檢討をおこなう。それを元に他の銅鏡や器物との關係について論じ，華西系鏡群の地域的な展開過程を明らかにする。

三段式神仙鏡については近年，五斗米道との關係を想定する說が發表されている（巫 2000 など）。ただし，現段階では分布や圖像の一部を材料としたものであり，強い根據が提示されているわけではない。上の檢討結果を用いることにより，史書などに記された五斗米道の歷史的動向と詳細に照らし合わせることが可能となる。

さらに三段式神仙鏡の特徵的な圖像世界は，道教經典に記された說話や神格と強いつながりをもつ可能性がある（森下 2011b）。こうした檢討結果を總合し，華西系鏡群と五斗米道の關係について論ずる。

1　華西系鏡群の年代と生産動向

まず三段式神仙鏡を中心に，構成要素とその組合せに基づいて分類検討をおこなう。他の鏡群との比較や出土狀況の檢討により，年代と地域という面から華西系鏡群の動向を明らかにする。

(1) 華西系鏡群の分類

三段式神仙鏡　華西系鏡群の中心となるのは三段式神仙鏡である。內區を二本の水平線によって上中下の三段に區分し，各段に人物，神仙，獸像を配置する。

上段は，中央に龜の上に載せられた華蓋を配し，その脇に女性の座像と大小の人物像を表す。これらの像については，銘文との對比から「母婦」と「九子」の像であることが明らかにされた（楢山 2007）。中段には東王父・西王母あるいは靈獸を置く。下段は中央に「建木」（林巳奈夫 1973）があり，その脇に堯とその娘，舜，蒼頡，燧人など聖帝に關連する人物の像を表す。

以下に代表的な例について，紋様の特徵などを細かくみてゆくことにしよう。

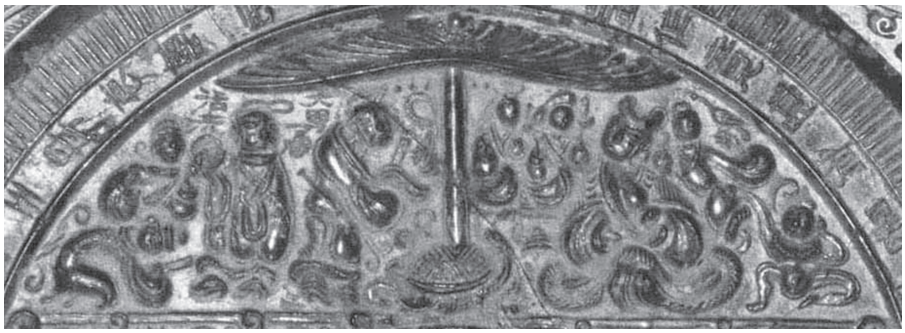
湖北省荊州博物館藏鏡は，今知られている例の中で，銘文・圖像とももっとも整った形を示す（圖 1-1）。なお本鏡については今まで「湖北省鍾祥市胡集墓出土」と示してきたが（中國古鏡の研究班 2011b，森下 2011a・b），出土地の情報に不明確な點があるため，所藏館名で記す。銘文は以下のとおり（華西 01　中國古鏡の研究班 2011a・b　以下銘文形式はこの文獻の整理番號を示す）。

> 黃盖作竟甚有畏，國壽無亟，下利二親。堯賜女爲帝君。一母婦坐子九人。翠盖覆貴敬坐盧，東王父西王母，哀萬民兮。

華蓋の右側には中心的な女性像（母婦）が座し，赤子を抱える。その周圍を大小の子が取り圍む。子の數は九人。中段は右側に渦狀冠をかぶる西王母，左側に三山冠の東王父が位置する。神像の兩脇にはいわゆる龍虎座が附屬する。雲氣ないし樹木狀表現の上に座し，その下に拜禮する人物や獸像を描く。下段は「堯賜女爲帝君」の場面を描いたもの。中央に林巳奈夫が建木と比定した樹木がある。からまりあう幹が上に伸び，左右に大きく枝を伸ばす。その左側に三山冠の堯，前で笏をもって跪く舜がいる。右側には堯の娘二人が座像として描かれる。銘文は內區外周の銘帶に記す。外區は菱雲紋で渦を六個入れる形式。

四川省綿陽市何家山 1 號墓出土鏡（圖 1-2，華西 02，何 1991）や邛崍市文物管理所藏鏡（華西 03，蘇 2008a・b，楢山 2007）は，基本的な特徵は荊州博鏡と似るが，圖像にはやや省略がめだつ。上段では赤子を抱える母婦像や中心的な二人の子の像はあるものの，それ

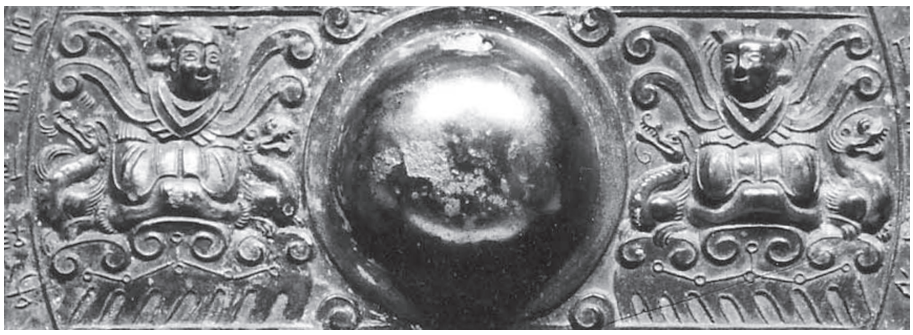
圖１　三段式神仙鏡（1：湖北・荊州博物館藏，2：四川・何家山一號墓，3：莊靜芬氏藏，4：西安・新城區咸寧路，5：上海博物館藏，6：陝西・鳳翔唐村鄉邸村）



1　湖北荊州博物館

2　シアトル美術館

3　上海博物館



4　シアトル美術館

圖 2　三段式神仙鏡上段・中段の圖像

1　シアトル美術館

2　荘静芬氏蔵鏡

3　西安咸寧路

4　クリーブランド美術館

圖３　三段式神仙鏡下段の圖像

表　三段式神仙鏡の諸要素

分類	地域	出土／所藏	徑（cm）	外區	文様帶	銘文	上段人物	中段	下段人物
a類	湖北	荊州博物館藏		菱雲六渦	櫛齒+銘	黄盖作竟甚有畏，國壽無亟，下利二親。堯賜女爲帝君。一母婦坐子九人。翠盖覆貴敬坐盧，東王父西王母，哀萬民兮。（華西 01）	母（抱赤子）+九子	東王父|西王母 龍虎座　樹上	堯舜|二女
	四川	綿陽何家山 1 號墓（何 1991）	18.3	菱雲六渦	櫛齒+銘	余造明鏡，九子作容。翠羽秘盖，靈鵝臺杠。調刻神聖。西母東王。堯帝賜舜二女，天下泰平。風雨時節，五穀孰成。其師命長。（華西 02）	母（抱赤子）+七子	西王母|東王父 龍虎座　樹上	堯舜|二女
	四川	邛崍市文物管理所藏（蘇 2008a）	17.4	菱雲四渦	櫛齒+銘	余造明鏡，九子作，上刻神聖。西母東王。堯賜舜二女，天下泰平。禾穀孰成。（華西 03）	母（抱赤子）+八子	東王父|西王母 龍虎座	二女|堯舜
		シアトル美術館藏（樋口·183）	18.8	三角二渦	櫛齒+銘	余作明竟大母傷。巧工刻之成文章。左龍右虎辟不羊。朱鳥玄武順陰陽。子孫備具居中央。長保二親宜侯王。樂兮。	母+六子	西王母|東王父 龍虎座 波？上	堯舜|二女
		西安未央區（西安·61）·莊靜芬氏藏鏡［踏返し品］	16.6	菱雲五～四渦	櫛齒+銘	余造明鏡，三王作容。翠羽秘盖，靈鵝臺杠。倉頡作書，以敎後生。燧人造火，五味。（華西 06）	母（抱赤子）+六子	獸|獸	蒼頡|燧人+一人
b類	陝西	西安東郊常家灣 1 號墓（程ほか編 2009）	17.6	變形龍紋	界圈+半圓方形	九子竟，清而明。利父母，便弟兄。夫妻相。宜長保，君長生。樂未央。	母+八子	西王母+蛇身神像|東王父+蛇身神像	（三人|三人）
	陝西	西安咸寧路（西安・60）	17.4	變形龍紋	櫛齒+半圓方形	九子竟，清而明。利父母，便弟兄。（華西 04）	母+九子	獸|獸	二人|二人
	陝西	西安東郊壩橋 457 號墓（陝西・76）	16.6	變形龍紋	櫛齒+半圓方形+獸紋	九子竟，…母便弟兄。	母+八子	西王母+蛇身神像|東王父+蛇身神像	三人|三人
	陝西	西安東郊韓森寨 4 號房 01 號墓（陝西・75）	17.4	變形龍紋	櫛齒+方形+獸紋	判讀できず	母+八子	東王父|西王母 倒立	二人|二人
		上海博物館藏（上海·64）	16.7	變形龍紋	櫛齒+方形+獸紋	九子明竟，幽湅三岡。巧工刻之周文。上有四守吉昌。（華西 05）	母+九子	獸|獸	二人（四目）|二人 倒立
		大英博物館藏（京大人文研資料）·尊古齋・69［同型］		變形龍紋	櫛齒+半圓方形	九子明□金岡，作□□□長生。	母+八子	東王父|西王母 求心	二人|二人 倒立

以外の子の數が減る。表現も簡略化が顯著である。また銘文は「一母婦坐子九人」から「九子作容」へ變容する。外區は菱雲紋。

シアトル美術館藏鏡（樋口・183）は，紋様表現は比較的整っているものの，子は六人。外區は三角形に渦を入れたもの（三角紋と稱する）。

西安市未央區出土鏡（華西 06，西安・61）は臺灣・莊靜芬氏藏鏡（圖 1-3）と同型品。雙方とも紋様が模糊とし，また鈕座の周りにある幅の廣い素紋帶は改作されたもので，後世の踏返し鏡である。上段は省略がめだつが，母と六人の子の像。下段（圖 3-2）では，

表　三段式神仙鏡の諸要素

分類	地域	出土／所藏	徑(cm)	外區	文様帶	銘文	上段人物	中段	下段人物
b′類		王綱懷氏藏	16.1	變形龍紋	銘	吾作明竟幽湅金岡。巧工造作成文章。多賀國家人民番息，胡羌殄威天下復。風雨時節五穀熟。傳後世樂毋極。	母(抱赤子)+七子	伯牙+鍾子期|東王父+西王母	一人|一人
		故宮博物院藏(故宮・55)	17.1	菱雲四渦	櫛齒+半圓方形	吾作月竟，幽湅三岡。巧工刻之成文章。上有四守石不羊。宜王。	母+八子	獸|獸　求心	二人|二人
		クリーブランド美術館藏(Chou 2000)	13.9	變形龍紋	櫛齒+半圓方形	吾作目竟，幽湅三岡，巧工刻之。	母+七子	西王母|東王父求心	一　人（四目）|一人倒立
		小校・15-75上		變形龍紋	櫛齒+半圓方形	吾作明鏡，幽湅金岡，□工刻。	母+七子	東王父|西王母求心	一人|一人倒立
		小校・15-75下		變形龍紋	櫛齒+半圓方形	吾作明竟，青而明，利父母兄弟。	母+九(?)子	西王母|東王父外向	二人|二人
c類	群馬	前橋天神山古墳	16.3	變形龍紋	櫛齒+半圓方形	君宜高官，長宜子孫，位至三公。	母+七子	東王父+一人|西王母+一人	二人|二人倒立
		古鏡圖錄・下5左(陳介祺・中133)	12.5	變形龍紋	櫛齒+半圓方形	君宜高官，位至三公，大吉利。	母+六子	東王父|西王母求心	一人|一人倒立
	陝西	鳳翔唐村鄉邸村(昭 1995)	15.1	素紋	櫛齒+半圓方形	君宜官，位至三□，宜古市□。	母+九子	東王父|西王母求心	二人|二人倒立
		服部コレクション(楢山 2012)	14.0	變形龍紋	櫛齒+半圓方形	君宜高官，生如山石，至作三公。	母+八(?)子	西王母|東王父求心	二人|二人倒立
		寧樂美術館藏(桃陰・22)	14.8	變形龍紋	櫛齒+半圓方形	君宜高官，位至三公，生如山石。	母+七子	東王父|西王母求心	二人|二人倒立
		ボストン美術館藏（歐米・44）	17.6	變形龍紋	櫛齒+半圓方形	當令買竟者令富昌，十男五女。	母+八子	西王母|東王父求心	一人|一人(四目)倒立
		巖窟・漢下14	11.3	變形龍紋	櫛齒+半圓方形	天王日月，天王日月，大吉。	母+四子	西王母|東王父倒立	一人|一人倒立
		村上開明堂藏(村上・55)	15.2	菱雲四渦	櫛齒+獸紋	なし	母+七子	西王母|東王父求心	二人|二人倒立
	陝西	西安乾縣六區(陝西・77)	14.8	變形龍紋	櫛齒+獸紋	なし	母+七子	西王母+一人|東王父+一人	二人|二人倒立
		莊靜芬氏藏	15.1	變形龍紋	櫛齒+獸紋	なし	母+七子	西王母|東王父求心	二人|二人倒立
		五島美術館藏		變形龍紋	櫛齒+半圓方形	なし	母+六子	東王父|西王母求心	一人|一人倒立

他に四川・綿陽西山崖墓と同・白乖嘴19號崖墓（雙方とも詳細不明），深圳博物館藏，『中國銅鏡』鏡など

まず建木の左に鳥を見て筆を手に持つ人物がいる。銘文の「倉頡作書」に對應し，鳥の足跡をみて文字を發明したとされる蒼頡の姿である。右側において三足器を挾んで向いあって作業する二人の人物は銘文の「燧人造火」にあたり，火の技術を人々にもたらしたとされる燧人を示す。蒼頡・燧人を圖像や銘文に表現したものは他の鏡式にはない。銘文には「三王作容」という特徵的な句がみられる。この「三王」は蒼頡・燧人など古代の聖帝をさすものと思われる。

西安市東郊常家灣1號墓（西安東漢・192），西安市新城區咸寧路（圖1-4，西安・60），西

安市東郊壩橋 457 號墓（陝西・76）の出土鏡や，上海博物館（圖 1-5，上海・64），大英博物館藏鏡などでは，上段の子の表現に違いがほとんどなくなり，ほぼ同形の姿が一列に竝ぶ。下段は建木の兩脇に二～三人の人物像を配するが，誰を表したものかわからない。

これらの鏡では紋様帶に半圓方形帶を用い，銘文は方格の中に配する。咸寧路鏡は，「九子竟，清而明。利父母，便弟兄。」（華西 04），上海博物館藏鏡では「九子明竟，幽湅三岡。巧工刻之周文。上有四守吉昌。」（華西 05）というように短文化し，「九子」を冒頭に置く。外區は平彫りで龍紋の崩れた雲氣狀の表現をめぐらす。ここでは變形龍紋と呼んでおく。變形龍紋にはいくつかの種類がある。

群馬縣前橋天神山古墳出土鏡，古鏡・下五左，陝西省鳳翔縣唐村出土鏡（圖 1-6　昭 1995）などでは，上段の九子像がさらに單純な形で表現され，區別がほとんどなくなる。下段は建木を挾んで二人の人物が向かい合うという構圖が多くなる。前橋天神山鏡の銘は「君宜高官，長宜子孫，位至三公。」で，「九子」や「三王」という特徵的な語句が消失している。外區は變形龍紋が主體だが，素紋のもの（圖 1-6）もあり，簡略化されている。

三段式神仙鏡の分類　以上のように三段式神仙鏡には，內區圖像，外區紋様，銘文など各要素の組合せにまとまりを認める。檢討の結果，次の三類に分ける。

a 類…外區は菱雲紋ないし三角紋を主體とする。銘文は長銘で內區の周りの銘帶に記す。銘文中に「一母婦」「九子」「堯」「舜」「蒼頡」「燧人」など圖像を直接に示す語をふくむことが特徵。上段圖像では子の像の造形區別が明瞭であり，服裝・所持物，姿などに違いがみられる。また中段の東王父・西王母には，いわゆる龍虎座を表す。

b・b’類…外區は變形龍紋を主體とする。銘文は半圓方形帶の方形に文字を記す例が增える。「九子明竟」「九子竟」というように，「九子」が圖像說明から離れ，銘文の冒頭に位置する。上段の圖像では子の像の造形區別が弱くなる。中段の神仙像から龍虎座が消える。

なお王綱懷氏藏鏡や故宮博物院藏鏡（故宮・55）のように，「吾作」から銘がはじまるものは，全體としては b 類の特徵をもちながらも，「九子」を銘にふくむ鏡群とはやや特徵を異にする。王綱懷氏藏鏡では，上段の子の圖像は單純化しているが，母は赤子を抱え，また中段に異例の伯牙像を入れる。故宮博物院藏鏡は外區に菱雲紋を用いる。これらは b’類としておく。

c 類…外區は變形龍紋あるいは素紋。銘文から「九子」や「三王」の語が消える。上段の九子像が硬直化し，ほとんど區別のない立像が竝ぶ。靈龜の頭部表現が小さいもの，あるいは省略されたものもある。建木は「8」字狀の簡略なものが增える。下段は向かい合う 2 人の人物像が主となる。

以上のa〜c類は，基本的に圖像や銘文の退化という變遷過程を示すものと考える。a類では上段の子の像が明確に區別されて表現されると同時に，荊州博鏡の「堯賜女爲帝君」「一母婦坐子九人」，西安市未央區出土鏡の「倉頡作書」「燧人造火」の姿をそのまま表した圖像を配する。銘文と圖像の對應が明確である。

b類ではそれが形式化し，本來は圖像を指すものであった「九子」が，「九子竟」のように作鏡主體者に變容し，圖像と銘文との對應が崩れる。九子表現の區別も薄れる。

c類ではさらに圖像が退化するとともに，銘文內容は圖像とまったく關係がなくなる。下段の圖像が上段の圖像に對して倒立したものや，中段の東王父・西王母が頭を鈕に向けた求心式のものが增え，上・中・下段の各像を一方向にそろえていた當初の配置が崩れる。上段の靈龜や下段の建木の表現が簡略化するのも同一の現象である。

こうした內區圖像や銘文の變化と外區紋樣も對應する。a類では菱雲紋が主體となるのに對し，b・c類では變形龍紋が大多數を占める。c類には外區が素紋となったものもみられる。

このようにa類で誕生した圖像や銘文が省略されてゆく過程を順に追うことができ，a類からc類への時間的變化を想定する。

方銘盤龍鏡・方銘獸紋鏡　內區圖像は異なるものの，三段式神仙鏡と共通性の強い鏡群がいくつかある（森下 2011a）。方銘盤龍鏡は，鈕座のまわりに盤龍像を置き，その周圍に銘文を入れた方格と各種の獸文を交互にめぐらす。盤龍像を鈕座とみて，「盤龍座獸帶鏡」と呼ぶこともできるが（上野 2005），ここでは盤龍鏡の一種としてあつかう。

古鏡・中 28 右（圖 4-1）や巖窟・2 下 74 の方銘盤龍鏡には「三王作竟」「三王善作」と

1　古鏡圖録・中・28 右　　2　西安市電信局第二長途通信大樓 163 號墓

圖 4　方銘盤龍鏡と方銘獸紋鏡

ある。先の西安市未央區鏡などと「三王」という特徴的な語が共通し，三段式神仙鏡と密接に關連することがわかる。外區紋様に多くが變形龍紋を用いる點も三段式神仙鏡 b 類と共通する。兩者は關連する製作者集團によるものと考える。

方銘獸紋鏡は，四ないし三體の獸像を內區に配し，その間に方銘を置く（圖 4-2）。同様の圖像で長文の銘を外區にめぐらし，中平などの紀年銘をもつ鏡群が「方格銘四獸鏡」などの名稱で知られている。この方銘獸紋鏡はそれらに比べて紋様などは簡素化しており，それらの模倣品と位置づける。外區には變形龍紋を用いるものが多い。

これらの鏡式に關しては，細分を可能とするほどの資料數や變化の違いを，今のところは認めることができない。外區紋様が變形龍紋を主體とすること，銘文形式からみて三段式神仙鏡 b・c 類と時間的に竝行するものと考える。

畫紋帶環狀乳神獸鏡・盤龍鏡　通常の畫紋帶環狀乳神獸鏡は精緻な圖像表現を特徴とするが，陝西省に分布する環狀乳神獸鏡は小ぶりで，紋様は簡素である。畫紋帶も，本來の雲車やそれを引く走獸の姿などが變形・簡略化されている。陝西地域で製作された模倣品と考える（森下 2011a）。

この鏡群は，銘文の文字遣いに三段式神仙鏡と共通點をもつ。他系統の神獸鏡では「幽湅三商」と表記するものが多いのに對し，「幽湅三岡」「幽湅金岡」と記す。また盤龍鏡の中にも，同様の特徴をもった銘文を記す例がある。分布も陝西・四川にまとまり，同地方で製作されたものと考えられる。ただし，これ以外の紋様要素や形態には三段式神仙鏡とのつながりは認められず，やや異なる生產系統に屬するものとみる。

(2) 華西系鏡群の年代

華西系鏡群には紀年鏡をもつ例がない。大まかには後漢後半代を中心とするものと考えられるが，上記の分類結果を年代的に位置づけるためには，他の鏡群との比較や墓葬資料の檢討が必要である。

他の鏡群との比較　三段式神仙鏡 a 類の外區は，菱雲紋を主體とする（圖 5-2）。この菱雲紋を最初に外區に採用した鏡群は，いわゆる廣漢郡系の獸首鏡と神獸鏡が中心となる。それらの鏡群における菱雲紋の出現は元興元（105）年銘環狀乳神獸鏡に遡るが，永壽二（156）年～中平四（187）年間の紀年鏡に多くみられる（圖 5-1　原田 1997）。

列點紋の有無など菱雲紋の表現に違いもあるので，直接に年代を結びつける材料とするのはむずかしい。ただし三段式神仙鏡 a 類段階は四川に中心があるもの推定され，隣接する地で生產されていた廣漢群系の鏡群を參照した可能性がある。前稿（森下 2011a）では兩者の關係は希薄としたが，こうした部分の共通性は認めてもよいかもしれない。いずれにしても菱雲紋という紋様形式が隣接する生產系統間でまったく無關係に登場し

1 熹平三年銘獸首鏡　2 三段式神仙鏡a類　3 双頭龍紋鏡　4 方銘獸紋鏡

圖5 外區紋様の比較

たものとは考えにくく，年代的にも近接するものと想定する。a 類の年代は 2 世紀中葉あたりに置くことができよう。

下限の年代材料となるのは畫紋帶對置式神獸鏡である。華西系鏡群は畫紋帶對置式神獸鏡に影響を與えている（森下 2011a）。銘文の冒頭に「九子」「九子竟」など特徴的な語句を用いる點が共通し，三段式神仙鏡 b 類の時期に，この鏡式が成立していたことを示す。半圓方形帶に銘を記すという點でも兩者は共通する。

畫紋帶對置式神獸鏡には，建安廿一（216）年，建安廿四（219）年などの紀年鏡があり，それらの圖像は末期形式に屬すると考えられる。畫紋帶對置式神獸鏡と華西系鏡群がおおむね平行するとすれば，その終末を 3 世紀前葉に求めることができる。

墓葬資料　三段式神仙鏡 a 類を出土した墓葬として，四川省綿陽市何家山 1 號墓がある（圖 6　何 1991）。高さ 50 m の小山の中腹に造られた崖墓で 1989 年に發見・調査された。前室と後室をもち，兩者を甬道で結ぶ。各墓室にはそれぞれ 2 基の棺を置き，計 4 基の埋葬がある。副葬品としては陶器，俑，銅器，鐵器などが出土した。鏡は三段式神仙鏡のほかに鳥紋鏡が出土したようだが，圖・寫眞は示されていない。また鏡がどの位置から出土したのか明らかでない。注目される副葬品として佛像の表された搖錢樹がある。初期の佛像表現の例として知られる。報告では墓の年代を東漢晩期に位置づけている。なお近接する何家山 2 號墓からも豐富な副葬品が出土しており，なかでも大型の銅馬や

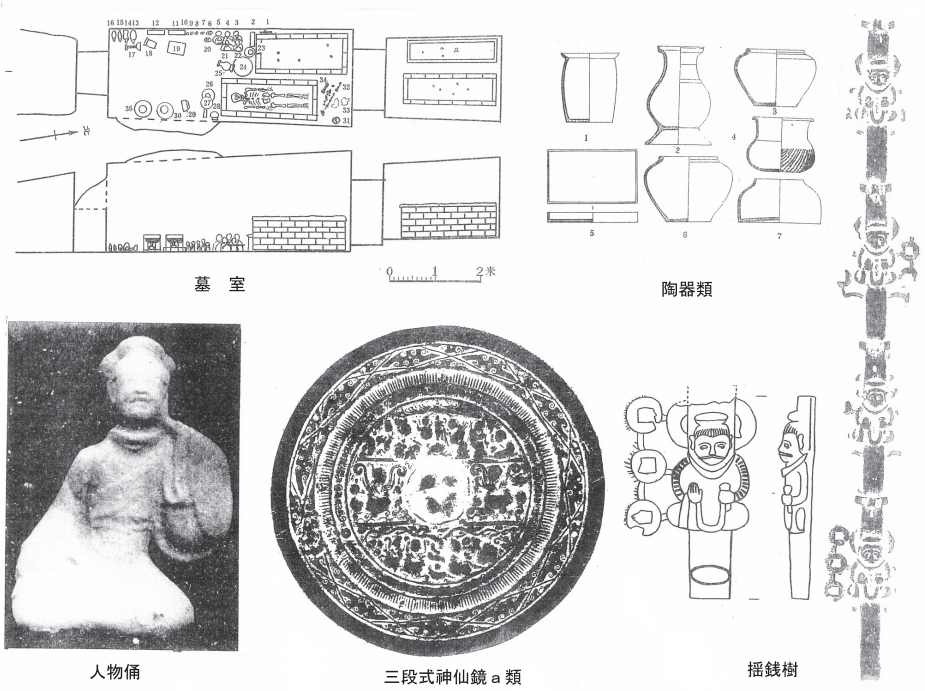


圖 6　四川・何家山 1 號墓

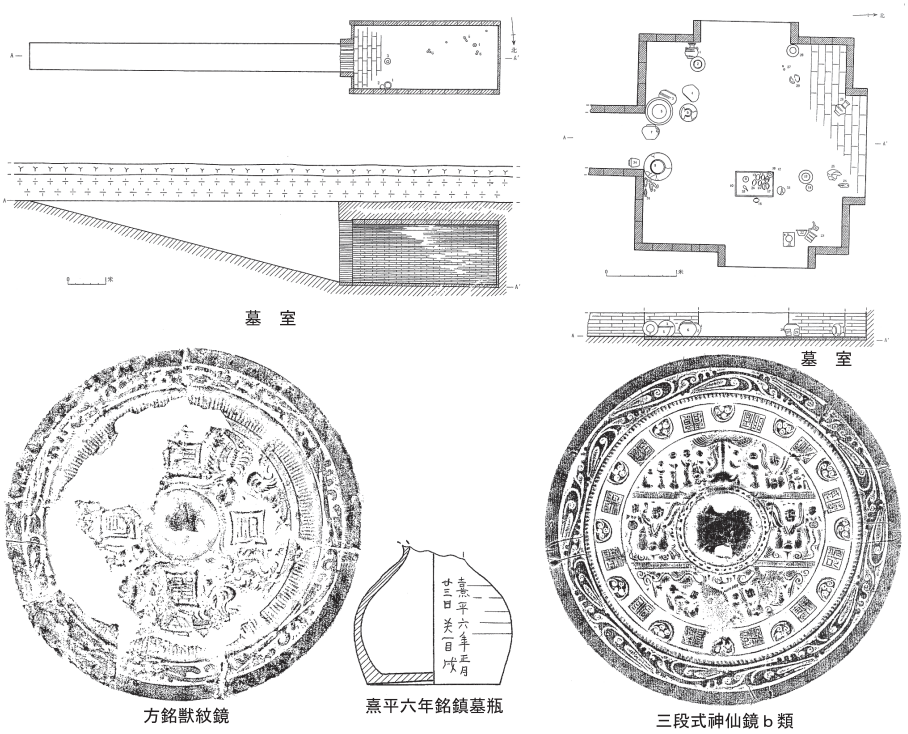
西王母などさまざまな装飾をもつ青銅製の搖錢樹が知られている。

西安市中華世紀城小區 22 號墓は，地下式で傾斜墓道と磚積墓室からなる，いわゆる土洞墓である（圖 7-1　程ほか 2009　758-764 頁）。出土した鏡は方銘獸紋鏡で，外區には變形龍紋をめぐらす。殘された副葬品は少ないが，「熹平六年正月廿三日」の紀年を記した朱書陶瓶が注目される。熹平六年は 177 年にあたり，追葬の有無などの問題はあるが，變形龍紋をもつｂ類の年代が 2 世紀後半代にあったことを示す。

西安市東郊常家灣 1 號墓はほとんどが破壞され，墓道・墓室・甬道の床面の一部が殘るにすぎない（圖 7-2　程ほか 2009　390-398 頁）。「九子竟」から始まる銘を方格に記し，外區に變形龍紋をもつ三段式神仙鏡ｂ類が出土した。副葬品は少ないが陶器，陶製明器，銅錢が共伴した。

このほかにも西安市電信局第二長途通信大樓 163 號墓，西安市石油學院 15 號墓などでｂ・ｃ類段階の方銘獸紋鏡が出土している（程ほか 2009）。西安の後漢墓では紀年のある鎮墓瓶によって年代の定點となる墓葬資料がいくつか知られている。それらの埋葬施設の形式や共伴遺物との比較からみて，以上の例も 2 世紀後半代に位置づけられる。

このように他の鏡群との比較，墓葬資料の檢討結果から，三段式神仙鏡ａ類を 2 世紀中葉，ｂ類の中心となった時期を 2 世紀後半に位置づける。そして 3 世紀前葉には終末を



1　西安・中華世紀城小區22號墓　　2　西安・東郊常家湾１號墓

圖７　西安東漢墓

迎えたものと考える。

(3) 華西系鏡群の生産動向

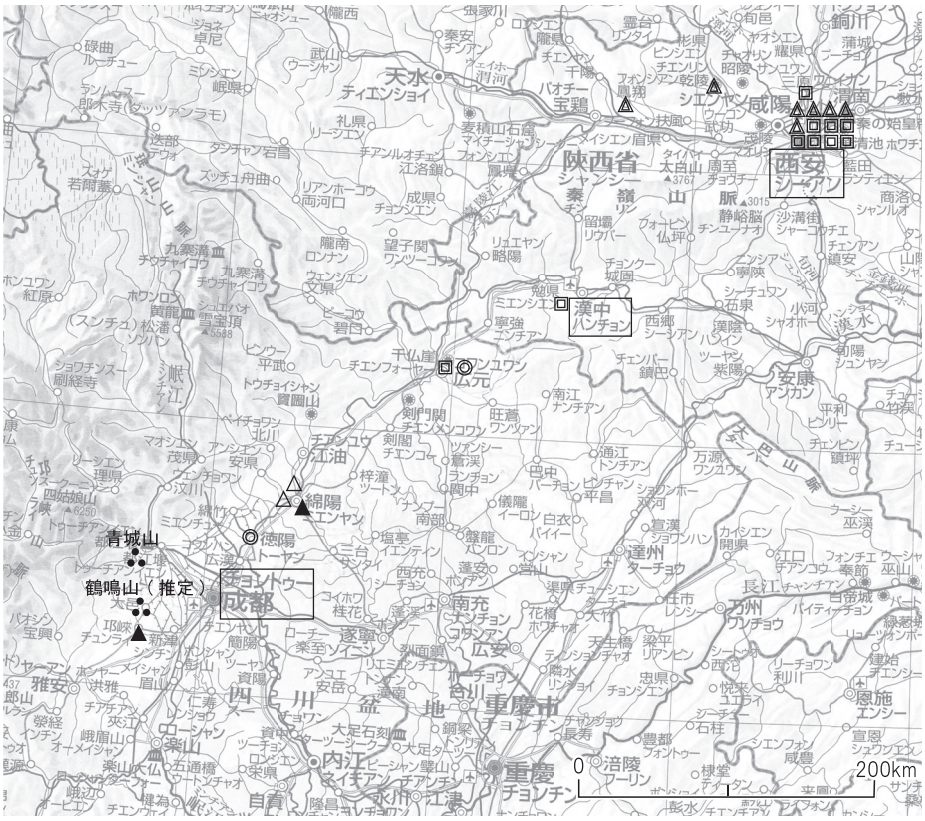
以上の検討をもとに，華西系鏡群の時期・地域的な展開について整理する。

四川における成立　華西系鏡群のはじまりは，四川における三段式神仙鏡の成立にあった。

三段式神仙鏡と四川との關わりについては，分布状況からこれまでにも注目されてきた（兪 1986，霍 1999，巫 2000 など）。あらためて分布を詳しくみると，圖８に示したように四川・陝西によくまとまることが理解できる。これ以外の地域では，今のところ湖北省と日本で各一例が知られているにすぎない。

さらに細かく検討すると，數は少ないものの，a 類が四川の成都周邊から出土している點が注目される。五斗米道の祖，張陵の傳承に關わる舊祉のある地域となる。

a 類段階の三段式神仙鏡と四川とのつながりは，造形表現の共通性にもみることができる。a 類では中段に表された東王父・西王母像に，いわゆる「龍虎座」をともなうことが特徴である（森下 2011a）。こうした龍虎座が四川の西王母表現の特徴であることは，はや



▲ 三段式神仙鏡 a　▲ 三段式神仙鏡 b・c　△ 三段式神仙鏡型式不明　◎ 方銘盤龍鏡　◻ 方銘獣文鏡

圖 8　華西系鏡群の分布

くに小南一郎によって取り上げられ（小南 1974），その後も多くの研究者によって追認されている。とくに周静は四川の畫像磚，搖錢樹などさまざまな器物にみられる西王母表現を集成的に検討し，そのほとんどに龍虎座がともなうことを確認した（周 2001）。誕生の當初は四川的な表現を備えていたものと評價できよう。

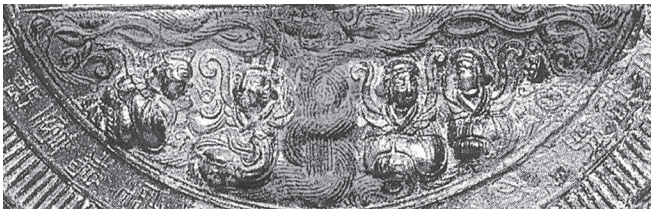
これに加え，さらに四川の地域性を示す造形表現がみられる。三段式神仙鏡の上段に表された母婦像は，乳房を出して赤子に乳をふくませた獨特の表現であるが（圖 9-1），これと同様の姿の女性俑が四川で發見されている（圖 9-2　四川省文化廳ほか 2009）。女性が胸を見せるような大膽な表現は，四川ではいわゆる「秘戯圖」を表した畫像磚とも通ずるところがある。この地域の造形様式と結びついた表現とみることが可能であろう。

また下段に表された建木についても，よく似た表現の漢代畫像磚が四川の出土例にある（圖 9-4　高文 1987）。樹木表現は畫像石や畫像磚に頻出するが，今のところ同様の造形例は他地域で見出していない。

以上の例は三段式神仙鏡の成立が四川にあることを示すものであると同時に，その誕

1　三段式神仙鏡上段の母子像

2　人物俑の母子像　徳陽市黄許鎮



3　三段式神仙鏡の「建木」

4　画像磚の「建木」表現　徳陽市

圖 9　四川の圖像表現

生がこの地域の造形表現，さらには背後にある信仰的な風土と關わることを示唆する。

四川から陝西へ　三段式神仙鏡は，b 類段階に四川から陝西地方に中心が移ったものと想定する。b・c 類の大多數が西安周邊に集中する。同段階の方銘獸紋鏡も西安周邊から多數出土している。

造形表現をみると，b・c 類では龍虎座が省略され，胸を出した母婦の表現も姿を消してゆく。これは四川の地域的な特徴が失われていったことを意味する。

さらに b・c 類の特徴として緣部形態がある。實見できた例と寫眞の觀察結果を總合すると，a 類の緣部端面は比較的まっすぐに立ち上るが，b・c 類では斜めの，いわゆる傾斜端面を呈するものが多い。この傾斜端面は，2 世紀前半に華北地域に廣がる蝙蝠鈕座式內行花紋鏡や雙頭龍紋鏡などにみられる。これらの鏡式は陝西地方にも數多く分布する。また c 類では銘文が「位至三公」「君宜高官」などの短銘の句が主體となる。これも 2 世紀代の蝙蝠鈕座式內行花紋鏡や雙頭龍紋鏡に多く用いられる銘文形式である。b・c 類の段階においては，陝西地方の銅鏡の傳統が影響したものと考える。

三段式神仙鏡だけでなく，方銘盤龍鏡など他の華西系鏡群の分布域も西安周邊に集中する。華西系鏡群は四川で誕生し，b 類の時點でその中心が陝西に移動したものと推定する。

華西から江南へ　華西系鏡群の動向が，後漢鏡全體の流れの中でもとくに注目される點として，遠隔地の生產系統との強いつながりがある。

畫紋帶對置式神獸鏡は精緻な紋樣表現を特徵とする神獸鏡で，分布は江南地域，とくに鄂城の墳墓群に集中する。また銘文中に「吳郡趙忠所作」(吳 03)，「吳造明鏡」(吳 04) などの語があり，長江下流域ないし中流域での生產が想定される。

この畫紋帶對置式神獸鏡と華西系鏡群とは，既に論じたように，三段式神仙鏡と銘文や圖像の一部に強い共通性を有する（森下 2011a)。銘文に「九子作竟」(吳 01)，「九子竟」(吳 02)，「三王作鏡」(吳 05・06) など三段式神仙鏡に起源する語をもつ。

九子作竟自有紀。富昊矣。　(吳 01　安徽省舒城縣八里雲霧村　六安・105)

九子竟與衆異，服者命長。　(吳 02　湖北省鄂州市寒溪公路　鄂城・102)

九子竟明清公。服富貴宜侯王。　(小校・15-69 表　奇觚・15-3)

九子作世而尙，服者吉利。　(湖北省鄂州市鄂鋼 544 工地　鄂城・95)

九子作明如光。服者侯王。　(京都府椿井大塚山古墳)

三王作鏡明而靑。服者宜先皇。　(吳 05　湖北省鄂州市鄂鋼 544 工地　鄂城・103)

三王作竟自有意。服者宜光九卿吳子。　(吳 06　陳介祺・下 155)

三王作竟，衆異宜侯。服者公侯。其師萬福。辟除不羊。(吳 06 補　陳介祺・中 135)

圖像では龍虎座の東王父・西王母像の表現が類似する。建木を挾む人物像表現がみられる點も共通する。畫紋帶對置式神獸鏡の製作者は，華西系鏡群から分岐してきた可能性が高い。その年代は三段式神仙鏡 b 類の段階にあてられる。また華西系鏡群の終末期には畫紋帶對置式神獸鏡も姿を消してゆき，銘帶式神獸鏡へと大きく變化する。

華西から一部の製作工人が江南に移動し，新たに生み出された鏡式が畫紋帶對置式神獸鏡であると考えられる。遠隔地間での工人の直接の交流を示す例として注目すべきであり，後漢における生產系統の活發な移動・活動狀況をみることができる。

華西系鏡群の動向　2 世紀中葉に四川の地で成立した三段式神仙鏡は，九子と母婦，堯舜・蒼頡・燧人など，他の鏡式には例をみない斬新な圖像とそれに關連する銘文を採用した。既存の鏡式を改變したものではなく，新たな信仰ないし世界觀をこめた圖像を作りだした鏡群と評價できる。その一方，造形表現の一部に地域的な特徵もあわせもつことも注目される。

2 世紀後半には紋樣や銘文は徐々に形式化が進むが，方銘盤龍鏡・方銘獸紋鏡など他の鏡式を模倣した鏡も作り始め，生產に廣がりをみせる。この段階に陝西に製作の中心が移動したと考えられる。また畫紋帶對置式神獸鏡など，遠隔地の生產に強い影響を及ぼした。そして 3 世紀前葉には終焉を迎えた。

2　五斗米道の動向

以上のような華西系鏡群の展開狀況と五斗米道の動向との關連を檢討する。上の分析結果を用いることにより，詳細な對比が可能となる。

まず史料にもとづき，五斗米道の歷史的流れについて簡單にまとめる。

史料からみた五斗米道　五斗米道の動きを傳える史料として，『典略』（『三國志』張魯傳に引く），『靈帝紀』（『後漢書』靈帝紀に引く劉艾の紀），『三國志』張魯傳・劉二牧傳ほか，『後漢書』靈帝紀・劉焉傳ほか，『華陽國志』，金石文資料などがある。史料間の記述に若干の齟齬のあることが問題となってきた。

順帝の頃（125-144）	張陵，蜀の鵠鳴山中にて道書を造作，百姓を惑わす。道を受くる者は五斗米を出し，世に米賊と號す。〔三國志・張魯傳〕（後漢書・劉焉傳では「順帝時」を加え，「鵠鳴山」は「鶴鳴山」，「道書」を「符書」とする。）
熹平二年（173）	「米巫祭酒張普題字」〔隸續・卷三〕
光和年間（178-183）	漢中に張脩あり，五斗米道を爲す。張脩の法は太平道の張角とほぼ同じで，靜室で加施し，病者を其の中に入れて，思過させる。人を姦令・祭酒とし，祭酒は老子五千文を都（に）習わせ，姦令と號す。鬼吏を置き，病者に請禱することを役目とさせた。請禱之法には三官手書を用いる。病者の家に米五斗を供出させ，五斗米師と號す。〔典略〕
年不明	張陵死す。子の張衡，其道を行う。衡死して，張魯，之を行う。〔三國志・張魯傳〕
中平元年（184）	巴郡妖巫張脩，叛亂を起こす。〔後漢書・靈帝紀〕
中平五年（188）	劉焉，益州牧に就任。〔後漢書・劉焉傳〕 張魯，劉焉に接近。魯の母に「少容」あり，焉家に往來する。〔華陽國志・漢中志〕
初平年間（190-193）	劉焉，張魯を督義司馬に任ずる。魯，別部司馬張脩と共に漢中太守蘇固を討つ。魯は張脩を殺害，漢中を制す。「鬼道」を民に教える。自らは師君と號し，鬼卒・祭酒などの地位や義舍などの設備を設ける。〔三國志・張魯傳〕（「初平」は華陽國志による）。張魯は張脩の業を信ずる民を用い，それを「增飾」した。〔典略〕

興平元年（194）	劉焉死す。子の劉璋が繼ぎ，張魯と對立。〔三國志・張魯傳〕
建安五年（200）	劉璋，魯の母・弟を殺害。〔三國志・張魯傳ほか〕
建安十年（205）	樊敏碑 「米巫殂瘧」
建安二十年（215）	曹操，漢中を攻略。張魯は降伏。閬中侯に封ぜらる。〔三國志・張魯傳〕

五斗米道の祖は張陵とされるが，傳說的な部分の多い人物であり，生沒年など史書でははっきりしない。四川の鵠鳴山（鶴鳴山）で道書・符書を作ったとされる年時は，『三國志』張魯傳では，漢の順帝の頃（125-144）と幅が廣いが，『漢天師世家』（『續道藏』所收明代）など後世の傳には漢安二（143）年とするものがある。傳承の眞僞は不明であるが，大淵忍爾の考證を參考に（大淵 1991　39-45 頁），140 年頃に成立したものと考えておく。

『三國志』では張陵－張衡－張魯と三代にわたって繼承されたと記すが，『後漢書』靈帝紀や『典略』に登場し，同樣に五斗米道を爲したという「張脩」との關係が問題とされてきた。『典略』によれば，張魯は張脩の業を利用し，それを「增飾」したとする。『三國志』の記述で，初平間に張魯と共同して漢中を攻略し，その後に張魯によって殺害されたのも「張脩」である。裴松之は張脩を張衡と同一人物としたが，異論が多い。また同時代性の高い記述とされる劉艾の『靈帝紀』には「巴郡巫人張脩」，『後漢書』靈帝紀でも「巴郡妖巫張脩」とあり，張脩は當初巴郡で活動したことになる（劉屹 2005 552～557 頁）。『典略』の張脩の記述をみると，五斗米道は早くから漢中に廣がっていたことになる。

張魯は，益州牧劉焉に近づいて地位を得て，その元で漢中を攻略した。「師君」として教民を組織化し，この地に教團の基礎を築いた。焉の子劉璋とは對立し，また斜谷を斷絕，漢使を殺害して獨立政權の樣相を呈することなった。しかし，建安二十年に曹操に服し，その政權に取り込まれる。太平道とは異なり，政權の中で發展の途を得たのであり，蜀・漢中の地から他地域へ天師道の信仰が廣まってゆくきっかけとなった。「北遷」と表現されるように五斗米道は，蜀から漢中を中心とする地へと中心が移動していったのである（周蜀蓉 2008）。

五斗米道の信仰　鬼卒・祭酒などの地位を定め，義舍を設け，教團を組織化したことが大きな特徵とされる。また活動としては病氣治療に重點があり，符を用いたこと，太平道と同じく自らの「思過」が重視されたことも注目される。

教法として問題となるのは，『典略』に張脩の業として描かれた「老子五千文使都習」である。道教における老子の神格化がもつ重要性についてはいうまでもないが，この段階において，それが「道」として教義の中でどのような位置を占めていたのか，議論の

的となっている。饒宗頤は，大英圖書館藏スタインの敦煌文書中から『老子想爾注』を見いだし，それが五斗米道において教典として採用されていた可能性を說いた（饒 1956）。日本では大淵忍爾が後漢末の五斗米道師の手によるものと推察した（大淵 1991）。

しかし『老子想爾注』が漢代にまで遡る根據は弱く，より後世の作とみる意見も強い。たとえば小林正美は劉宋期の成立と考える（小林 1990　296～327 頁）。『老子想爾注』の問題はおくとしても，『道藏』に收められた道教經典は年代の同定がむずかしく，五斗米道の時期にまで遡ってその信仰內容を知ることができる史料はきわめて乏しい。

華西系鏡群と五斗米道　以上に概略をみた五斗米道の展開と，先の華西系鏡群の動向を比較してみよう。張陵が五斗米道を開設したとされるのは 2 世紀中葉で，その地は蜀郡・廣漢郡周邊であった。三段式神仙鏡も 2 世紀中葉に a 類が成立し，分布・造形表現からみても，その發生は四川であった。

2 世紀後半には漢中で張脩が勢力を張り，またその後，張魯が漢中を攻略し據點を形成する。この時期に華西系鏡群は陝西地域へと展開し，造形表現の四川色が薄れてゆく。なお同時期において四川の器物が漢中地域に浸透した例として，搖錢樹もあげられる（小澤 1998）。

現狀では，この段階の華西系鏡群の出土例は西安周邊に集中する。漢中地域の後漢鏡資料は乏しく，製作地が西安周邊か漢中かは不明である。後漢末期においては，戰亂や五斗米道の動きとも關連し，關中地域と漢中との間の人の移動を示す記事が各種認められる（大淵 1991　55-58 頁）。どちらが製作地であるにせよ，こうした密接な地域間關係の中で銅鏡の分布に移動と廣がりが生じたものと理解できよう。そして曹操の進駐に降伏し，漢中政權が崩壞した 3 世紀前葉に，華西系鏡群は終末を迎えた。

このように華西系鏡群の展開は，五斗米道の動向と年代・地域が細かい點で重なることが理解される。この鏡群と五斗米道とのつながりを，あらためて強く示すことができる。

3　三段式神仙鏡の圖像世界と道教

(1) 三段式神仙鏡の圖像の新解釋

華西系鏡群と五斗米道の關係について，三段式神仙鏡の新たな圖像解釋から議論する。

圖像解釋のあゆみ　三段式神仙鏡の圖像解釋は，林巳奈夫によって着手された（林巳奈夫 1973）。林は中央の龜の背に乘った蓋の像を「華蓋」とし，段玉裁注に「華蓋星覆北斗」とあることを引いて，これを「華蓋星」とした。そして『晉書』天文志で，今日の北極星に對應する天皇大帝の上に華蓋の星座があてられていることから，上段の中心的な人

物像を天皇大帝，周圍の人物像をその臣と同定した。上段全體を，北天の星座を象徴的に表した圖像と解釋した。また下段については，一方の人物像が四目に表されることから蒼頡に比定し，對をなす人物像を神農とみなした。これらの説明に對して疑問を呈する向きもあったものの（樋口 1979　226 頁），漢鏡の圖像に關する斬新な解釋として，定説的な位置を占めてきた。

これに對して新資料がもたらされた。霍巍は四川何家山 1 號墓出土鏡の銘をもとに，上段の圖像が銘文にある「堯帝賜舜二女」にあたると考えた（霍 1999・2000）。

楢山滿照は何家山鏡など實物資料を詳細に檢討し，上段の中心圖像が母婦像と「九子」からなること，下段の人物像こそが堯舜と二女であることを，銘文・圖像の雙方から明らかにし，研究に新たな光明をもたらした（楢山 2007）。この畫期的な研究によって圖像理解は大きな轉換を迎えることとなった。ただし，この上段の母子が具體的にどのような神格であるかは問題として殘された。それらが東王父・西王母より上の段に置かれた理由も不明であった。

圖像の新解釋　問題の上段の圖像については，『道藏』洞眞部の「玉清無上靈寶自然北斗本生眞經」（以下では北斗本生經と略稱　シペール・ナンバー 45　以下 S. N. と略）を參照することにより，全體が整合的に説明できると考えた（森下 2011b）。その後に氣づいた點をふくめ，詳しく對比してみよう。

北斗本生經には次のような物語を記す。

> 在昔龍漢，有一國王，其名周御，聖德无邊，時人稟受八萬四千大劫。王有玉妃，明哲慈慧，號曰紫光夫人。誓塵劫中，已發至願，願生聖子，輔佐乾坤，以裨造化。後三千劫，於此王出世。因上春日，百花榮茂之時，遊戲後苑，至金蓮花溫玉池邊，脱服澡盥，忽有所感，蓮花九包，應時開發，化生九子。其二長子，是爲天皇大帝，紫微大帝，其七幼子，是爲貪狼，巨門，祿存，文曲，廉貞，武曲，破軍之星。或善或惡，化導群情，於玉池中，經于七日七夜，結爲光明，飛居中極，去地九千萬里，化爲九大寶宮。二長帝君居紫微垣太虛宮中勾陳之位，掌握符圖，紀綱元化，爲衆星之主領也。

> むかし龍漢の時代，ある國に周御という國王がおられ，聖德はかぎりなく，時の人は八萬四千大劫にわたりその恩を受けた。王には玉妃があり，明哲，慈慧にして，紫光夫人と號した。夫人は塵劫中に誓い，至願を發し，聖子を生むことを願って，乾坤を補佐し，運氣を增大させてきた。三千劫の後，王は出世した。夫人は上春の日，百花が榮茂する時，後苑にあそび，金蓮花溫玉池のほとりに至って衣服を脱いで水浴びをしているとき感應した。九つの蓮花の包みが開發して，九子を生じた。

二人の長子は天皇大帝，紫微大帝であり，他の七人の幼子は北斗を構成する貪狼，巨門，祿存，文曲，廉貞，武曲，破軍の星々となった。善悪さまざまな群情を導き，玉池にて七日七夜を經て，結んで光明となり，天の中極に飛居し，地を去ること九千萬里にして，九大寶宮と化した。二人の帝君は天空の紫微垣太虛宮中の勾陳の星座に位置し，符圖を掌握，紀綱を元化し，衆星の主領となった。

「太上玄靈斗姆大聖元君本命延生心經」（洞神部　S.N. 621　斗姆經）では，この婦人を「斗母（斗姆）」と呼ぶ。

因淋浴於九曲華池中，湧出白玉龜臺神獬寶座，斗母登于寶座之上…洞徹華池，化生金蓮九苞，經人間七晝夜…是九章生神，應現九皇道體。一曰天皇，二曰紫微，三曰貪狼，四曰巨門，五曰祿存，六曰文曲，七曰廉貞，八曰武曲，九曰破軍。天皇，紫微尊帝二星居斗口娑羅上宮…

天人感應により，賢聖なる紫光夫人は夫を介さずして九子を爲し，それらの子は天に昇って北辰・北斗の星々となった。彼らを生んだ聖なる母は「斗母（斗姆）」と呼ばれるに至ったである。

上段圖像の解釋　三段式神仙鏡の上段に表された母婦と九子は，斗母と星々になったその子たちにあてることができる。荊州博鏡をもとに圖像と詳しく對比してみよう（圖 10）。

全體は，華蓋の右側に位置する母婦に對し，大小の子が取り圍み，讃仰するという構圖をとる。子の數は「九子」であり，銘文中でも「子九人」と記す。

華蓋の左側には笏をもって拜禮する男性（子 1）と，先に巾着袋を吊下げた竿を肩にかけ，顔だけを母婦像に向けた男性像（子 2）を他の子より大きく表す。前者の後ろに「大男」，後者の脇に「活老」の榜題がある。その背後に鏡らしき圓盤狀の器物をもつ人物（子 3）と，笏をもって跪禮する人物（子 4）とがいる。母婦像の前には二人の女性らしき像が左手に何かをもって捧げる姿勢を示す（子 5・6）。母婦像の背後から，右手に棒狀の器具を胸に差し出す人物がおり（子 7），その下には幼兒らしい像が兩手・兩脚を大きく廣げる（子 8）。また母婦は赤子（子 9）を抱きかかえ，襟元をはだけて出した片方の乳房をあてがっている。母婦の着物は裾などに縫い取りが施されており，豪華な衣裝をまとう。この母婦は銘文中では「貴」とも表現される。

華西系鏡群では，「一母婦坐子九人」「九子作容」「九子作」というように銘文中で「九子」を強調し，圖像でも九子を表す。先の物語でも斗母が產んだのは「九子」であり，かつそれらは北辰の星々となった特別な子達であった。

「九子」のうち中央の子 1・2 の二人の人物は，先の物語の天皇大帝，紫微大帝に當てることができる。これらの像は他の子よりもひときわ大きく描かれ，着物の表現も丁寧である。このように特別な表現となったのは，北辰の中でも中心的な神格であるからだ

と説明できる。榜題の「大男」は長沙走馬樓吳簡などに例が多いが，成人した男性を意味するものであろう。「活老」は用例を見出していないが，やはり成熟した人物を示すものと考える。子が成長し，重要な職に就いたことを表す。

他の七子は北斗を構成する星々であり，貪狼以下の七人と對應する。それぞれの子ごとに表現を變えている。後で觸れるように道教經典では，北斗を構成する星々それぞれに，役割に違いが割り當てられた。これらの子は左の端から順に，上下にも配しながら列狀に續く。この配置の原型は北斗の形を意識したものであったかもしれない。

中央の蓋の圖像は林巳奈夫の考證どおり，北天の星座，華蓋座である。銘文にみられる「杠」も『晉書』天文志に「蓋下九星曰杠」とある星宿を表すものである。『後漢書』輿服志，車輿の說明に「輿方法地，蓋圓象天。三十輻以象日月，蓋弓二十八以象列星。」とある。華蓋は北辰の星座のひとつとして描かれただけではなく，宇宙の中心の象徵であり，その傘の廣がりは，天空の星々の廣がりを意識したのであろう。華蓋の下の龜はもちろん北方の象徵である。あるいは斗母經に登場する靈龜を意識したものかもしれない。

北天の星辰と，その中心をなす聖なる母である斗母を表現したものとして，上段の圖像全體を整合的に理解できる。

三段式神仙鏡の圖像世界　このように上段が說明できるならば，中段・下段の圖像との關係も明確となる。北天の星辰は北極星と北斗をはじめとして天の中心をなす「中宮」であり，その運行を司る位置を占める。

中段は西王母・東王父が表された神仙の世界にほかならない。

下段は，堯舜・燧人・蒼頡など，「禪讓」「造火」「作書」によって人類世界に新たな文化をもたらした聖帝たちが主題となる（森下 2011b）。人皇が「人爲」によって治める地の世界である。中心にそびえる樹木表現は，建木という同定が正しいならば，『淮南子』墜形訓の「衆帝所自上下」と對應する（林 1973）。また根を力強くはわせ，枝を大きく廣げた姿に描いたのは，上段の華蓋と對照させ，大地の中心を示す意圖がある。

天地の運行を司る北辰・北斗に關わる圖像群が最上位に位置するのは自然であり，三段に分けられた圖像は，天界，仙界，人界を整然と表現したものとして統一的な說明が可能となる。また上段は北，中段は東西，下段は南という秩序にも則る。このような解釋によるなら，各段の圖像のほぼすべてを互いに關連づけて說明できる。

そして斗母，北辰，北斗は，それらが北斗本生經などの經典にそろって表されているように，道教信仰と深く結びついた神格である。ここに三段式神仙鏡と五斗米道を關連づける，もうひとつの接點を見いだすことができよう。

荊州博物館蔵鏡の銘文（華西 01）

黄盖作竟甚有畏、	黄盖　鏡を作るに、甚に威あり。
國壽無亟、	國壽は極まり無く、
下利二親。	下は二親に利す。
堯賜女為帝君。	堯は女を賜はり、帝君為り。
一母婦坐子九人。	一母婦坐し、子は九人。
翠盖覆貴敬坐盧、	翠蓋は貴を覆ひ、敬みて盧に坐す。
東王父西王母、	東王父・西王母あり、
哀萬民兮。	萬民を哀しむ。

圖 10　三段式神仙鏡の圖像世界と銘文

(2) 北辰・北斗・斗母と道教信仰

三段式神仙鏡の上段圖像に比定した斗母・天皇大帝・紫微大帝・北斗は，道教の重要な神々として，現在に至るまでその信仰は續く。圖像內容と道教との關係をさらに詳しく檢討してみよう。

天皇大帝・紫微大帝　天皇大帝は，林の考證にもあるように，『晉書』天文志中宮條では「鉤陳口中一星曰天皇大帝，其神曰耀魄寶，主御羣靈，執萬神圖」として北天の中心であり，もろもろの神靈を統御する存在と位置づけられた。『尙書』舜典の鄭玄注「昊天上帝謂天皇大帝，北辰之星也」に示されるように，後漢代には上帝と一致させる見方が生じ，緯書にも登場する。道教の神々としても引き繼がれ，經典の中では，三淸につぐ四御の一人とされる。

紫微大帝は，道教經典では北極紫微大帝とも呼ばれ，北極の星を神格化した存在とされる。北極の周圍の星々を天の宮廷になぞらえて紫微宮と稱するが，その中心をなす神格とみることができる。

北天の星にあてられた神格としては，太一（泰一）神がある。前漢武帝がとくに太一信仰に力を入れたことはよく知られている。『晉書』天文志では天皇大帝の方が北極近くに位置し，太一・天一はやや中心からはずれた場所としている。兩者が同一視されたこともあるようだが，おおむね太一から天皇大帝へと，北極の中心となる星辰の神格が推移したものと想定できる。

北斗信仰　北斗に對する信仰は戰國時代以前に遡り，今に至るまでその崇拜の歷史は長い。

『史記』天官書には「北斗七星，所謂旋璣・玉衡，以齊七政」とある。「七政」について『尙書大傳』は「七政，謂春，秋，冬，夏，天文，地理，人道，所以爲政也。人道政而萬事順成。」とする。北斗は四季，天地人文のあらゆる事象を司る役割を擔っていた。また天官書には「斗爲帝車，運于中央，臨制四鄕。分陰陽，建四時，均五行，移節度，定諸紀，皆繫於斗」ともあり，天帝の乘車として，陰陽，四時，五行など諸々の秩序を司る存在でもあった。

『史記』では北斗の七星それぞれの名稱はあげていないが，『史記索隱』に引く緯書『春秋運斗樞』は「斗，第一天樞，第二旋，第三璣，第四權，第五衡，第六開陽，第七搖光。第一至第四爲魁，第五至第七爲標，合而爲斗」とする。また『五行大義』卷四に引く『黃帝斗圖』には，先の北斗本生經と同じ貪狼以下の名稱が登場する。漢代には各々の星に名稱をつけ，それぞれに個別の神格を認めていたようである（麥谷 2000）。

『漢書』王莽傳では，「莽親之南郊，鑄作威斗。威斗者，以五石銅爲之，若北斗，長二尺五寸，欲以厭勝衆兵。」とあり，北斗の象徵物が辟邪の役割を果たしたことを傳える。

一方『晉書』天文志などには「北斗主殺罰」という表現もみられる。南斗が生を扱うのに對し，北斗は死を司る神格であった。林巳奈夫は武氏祠後石室の畫像石に表された北斗車とその乘者を，死者の功罪を取り調べる北斗君に見立てた（林 1974　256～258 頁）。小南一郎は陝西・河南出土の朱書瓶の銘から，死者が北斗公の元に向かうとの思想を讀み取る（小南 1994　22・23 頁）。

六朝期に遡るとされる道教經典『赤松子章曆』卷之四の解天羅地網章には「謹請北斗七星，貪狼巨門斷絶死源，祿存廉貞替易死形，文曲武曲削除死錄」と記しており，北斗の各星と死に關わる解除の儀とを示す內容となっている（Seidel 1987）。死病に關係したさまざまな災いを避け，解除する存在としての北斗に對する信仰も後漢には成立し，六朝期には確實に道教と結びついていた。

北斗をめぐる實際の祭祀のあり方を示す記事として，『抱朴子』登涉篇には「以甲寅日丹書白素，夜置案中，向北斗祭之」とある。六朝初期において北斗を祭る風習が廣い階層に及んでいたことを知る。また禹步も北斗信仰と關係する作法として登場する。

こうした道教における北辰・北斗信仰は，後に佛教と融合し，とくに密教に強く繼承され，日本にも流入して廣く流布した。北辰・北斗信仰と道教との關わりや日本への影響については，麥谷邦夫の論に詳しい（麥谷 2000）。

本命星　道教における北斗信仰のあり方のひとつとして，本命星がある。生年の干支により，北斗の星々それぞれを割り振り，それらが運命を司る星とみなす信仰である。「太上玄靈北斗本命延生眞經」には「北斗第二陰精巨門元星君　丑亥生人屬之」などとある。

三段式神仙鏡の圖像では，年齡に應じて七子の姿や衣服を描き分けて表す。こうした表現方法は，道教經典において貪狼以下，北斗のそれぞれの星に性格の違いを區別する點と共通する。

北斗信仰と五斗米道　北斗信仰と道教，五斗米道との關わりを，直接に示す道教經典が存在する。

『道藏』洞神部には，先の北斗本生經以外に，「太上玄靈北斗本命延生眞經（北斗延生經と略稱する　S. N. 622）」，「太上玄靈北斗本命長生妙經（北斗長生經　S. N. 623）」，「太上說南斗六司延壽度人妙經（南斗經　S. N. 624）」，「太上說東斗主算護命妙經（東斗經　S. N. 625）」，「太上說西斗記名護身妙經（西斗經　S. N. 626）」，「太上說中斗大魁保命妙經（中斗經　S. N. 627）」など，斗に關連した經典をまとめて收める。これらを合わせて「五斗經」と稱する。經典名でもわかるように，「長生」「延壽」のための呪法に關する經が中心となる。

この五斗經には，老君が蜀の正一天師（張陵）に傳授したとの記述がある。すなわち，北斗延生經では「爾時太上老君，以永壽元年正月七日…（中略）…分身敎化，化身下降，至於蜀郡…（中略）…授與天師北斗本命經訣」とする。

こうした記事から五斗米道と北斗信仰との關わりについては，一般的に言及されるところとなっている。卿希泰は，「五斗米道」の名稱自體が，五方星斗崇拜と關連あるものみた。「米」と「姆」は音通し，「斗米」を「斗姆」とみる。五斗米道における北斗，斗姆重視を示すものとした。また『漢天師世家』に張陵の母が，「神人が北斗魁星中から降臨した夢をみて，感應して妊娠した」との傳說があることにも着目する（卿 1980）。同様の記事は『道藏』洞眞部所收の『歷世眞仙體道通鑑』張天師傳にもみられる。

もとより，これらの記述は後世に作られた假託である。饒宗頤は「張道陵著述考」において，五斗に關わる經典類は「存疑十種」として扱い，「後人增益之作」とする。一方で先の『抱朴子』を引き，晉以前に北斗の祭祀があったとも考える（饒 1991）。『道藏提要』では五斗經を唐宋の作品と位置づける。五斗經中に登場する地名が，晉以後や唐代設置のものであることも考證されている（卿編 1988　161 頁）。『道藏通考』（Schipper and Verellen ed. 2004）も同様に，これらの經典の多くを唐末～宋代に比定する。

一方，蕭登福は北斗延生經の原型は張陵の段階に成立したものとし，五斗米道と五斗信仰との密接なつながりを主張する（蕭登福 1997）。經典の最終的な成立年代が降るとしても，北斗ないし五斗信仰と五斗米道との關係性を否定することにはならない。

すくなくとも唐末～宋の時期において，張陵と北斗信仰を強く結びつける何らかの傳承が存在したことは確かである。そして先にもみたように，北辰・北斗の信仰は後漢代に發展し，六朝期の道敎に繼承される。これらの記述は，五斗米道において北斗信仰が重視されていた可能性を示す資料として提示できる。

斗母と女岐　斗母は，「斗姆」「斗姥」「斗母老」などと表記され，「斗母元君」とも呼ばれる。印度由來の摩利支天と融合したとされ，現在の斗母像は三目四面八臂の姿を呈する。

北京・白雲觀，四川・青羊宮の斗姆殿などでは斗母像が祀られており，今日の道敎でも重要な神格のひとつとされる。臺南の天壇では後殿の中央に斗母星君の像が据えられ，その周圍に東西南北の斗星君が竝ぶ（坂出 2005　23 頁）。高位の神格として扱われ續けている。

三段式神仙鏡の上段の母婦像を斗母と比定する際，問題となるのは年代である。北斗本生經，斗姆經の成立も唐末～宋代に位置づけられている。天皇大帝や北斗の星名とは異なり，それ以前に遡る用例を文獻上では見出していない。斗母信仰は佛敎の影響を受けて宋代ごろに發生し，元代以降，摩利支天信仰と關係しながら發展したとみるのが一般的である（蕭進銘 2011）。先の北斗本生經にも佛敎色の要素が強く，唐以降に形をなした經典とみられる。

ただし「斗母」という名稱ではなく，北辰・北斗の星々を產んだ聖なる母としての神

格は漢代から存在した可能性がある。それを示唆する資料として，『楚辭』天問篇の一節をとりあげる。星川清孝の釋讀（星川 1970）を掲げる（一部改變）。

日月安屬，列星安陳	日月いづくにかつき，列星いづくにか，つらなる。
出自湯谷，次于蒙汜	湯谷より出でて，蒙汜にやどる。
自明及晦，所行幾里	明より晦に及ぶまで，行くところ幾里ぞ。
夜光何德，死則又育	夜光なんの德ぞ，死すれば卽ちまた育す。
厥利維何，而顧菟在腹	その利これ何ぞ，而して顧菟，（月の）腹に在り。
女岐無合夫，焉取九子	女岐は夫に合ふこと無くして，なんぞ九子を取れる。

「女岐」に對し，後漢・王逸は注で「女岐，神女，無夫而生九子也」とする。『漢書』成帝紀の「甲觀畫堂」への後漢・應劭注に「甲觀在太子宮甲地，主用乳生也。畫堂畫九子母。」とある。「女岐」は後漢代において九子母という神格とみられていたことがわかる。

他に用例の乏しい「女岐」の解釋は難問であり，種々の說明がおこなわれてきた。その中で游國恩が『史記』天官書の「尾爲九子」をとりあげ，『史記正義』の「尾九星爲後宮，亦爲九子星」を參考に「尾星」との關連性を指摘したのは注目される（游 1982）。上の一節においては，「女岐」が天文現象と關わる神格でなければ文脈が通らないのである。

三段式神仙鏡の圖像解釋から論じてきた九子の母＝北辰・北斗の母が，この女岐と共通する神格とみることができるなら，この一節の理解に筋道をつけることができよう。「無合夫」して九子を產んだという點は，天人感應によって九子を爲した斗母と同じである。日月・列星について述べた節に續いて，北辰・北斗の誕生に關係した神格に言及したものとみることができる。日月に竝ぶものとしては尾星では役不足であり，天の中心たる北極・北斗に關わる神格がふさわしい。

このようにみるなら，上の一節は，さまざまな天體や天文に關する傳承とその不思議さに對する問いかけとして，北辰・北斗の誕生に觸れたものとも理解できる。この節に續いて登場する「伯強」は一般に北方の風の神と解されており，「天の方角と風との關係說話を竝べあげた」（星川 1970　114 頁）とすれば，後へのつながりも明確となる。

女岐は，『廣弘明集』卷三所收の『遂古篇』に女媧や共古などと竝んで「女妓九子爲民先兮」として登場している。天問篇を下敷きとした記述ではあるが，六朝期においても神格として認められていた形跡がある。斷片的な資料しか殘されていないが，北辰・北斗を生んだ聖なる九子母への信仰が，斗母という形をとる以前から存在していた可能性を示す。

多子母像の系譜　九子母については近年，鬼子母神との關連も注目されている。趙邦彥ははやくに天問篇や成帝紀の九子母に着目し，印度由來の訶利帝母－鬼子母神とのつな

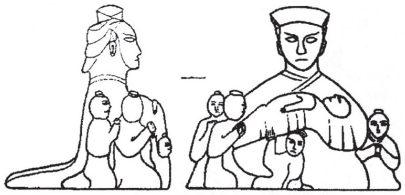
がりをみた（趙 1931）。

謝明良は，母と多子からなる造形資料を廣く募集し，それが漢代から色々な形で存在することを確かめ，鬼子母神との關係を說く（謝 2009　圖 11）。三段式神仙鏡の上段の母子像については，楢山の說を引き，漢代におけるさまざまな母子像の存在を想定する。謝が示した資料の中には，三段式神仙鏡の母婦像とよく似た，胸に赤子を抱えた母子像もある。漢鏡の銘文にも「五男四女九子」などという表現がしばしばみられるが（銘文 601・717 の注參照），造形資料と同樣に求子・多產への願いをこめて「九子」を表現する風習は漢代において成立し，その後も長く引き繼がれる。

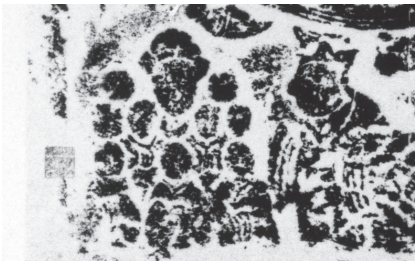
この研究結果と照し合わせると，三段式神仙鏡の母子像のもつ特性はより鮮明になる。謝がとりあげた他の母子像においては，子がいずれも乳幼兒として表現され，母子ともに正面を向くのが特徵である。それは大小さまざまに子を描き分けた三段式神仙鏡の圖像と決定的に異なる點である。

三段式神仙鏡では，成人して星となり，それぞれに職掌をもった子たちが，聖なる母を讃仰するという情景が上段の中心主題である。圖像が形骸化した b・c 類段階に至っては，乳幼兒像が姿を消し，成人の子のみが表されるようになる。

あくまで成長した子が畫題の主體として墨守されたのであり，單に子の多さを表現した圖像ではない。漢代の多子母像には，背景を異にする複數の系譜が存在したことを物語る（沈曾植 2009）。



1　銅像　山東・莒縣



2　畫像石　山東・微山兩城山

3　石窟像　四川・巴中

圖 11　多子母像の系譜

4　三段式神仙鏡の展開

三段式神仙鏡の變遷　三段式神仙鏡の成立時には，上段の北辰の世界，中段の仙界，下段の聖帝の治める人界という圖像構成が明確であった。

その圖像が，同時期の他の鏡式とは別格の世界觀を提示していることを強調しておきたい。この鏡式は從來，神獸鏡の範疇に入れられることが多かった。しかし環狀乳神獸鏡など各種の神獸鏡の主題は神仙世界である。畫像鏡も圖像表現は異なるが，主役は神仙と靈獸である。

ところが三段式神仙鏡は，神仙界とともに星辰界と地上界をふくめた，さらに壯大な世界を表現する。先にも述べたように既存の鏡式の繼承や改變ではなく，獨創的な圖像世界を生み出した鏡式と評價できる。この點からも，その誕生の背景に新たな信仰の成立との關わりを想定することが可能であろう。

b・c 類の段階において，そのような世界觀がどの程度まで維持されていたかは問題である。すでに a 類の段階で上段の圖像は「九子」でなくなる。b・c 類では子の造形區別もほとんど失われてゆく。「九子」が銘文の冒頭に位置し，「九子作」というように作鏡主體を示すようになるのも，本來の圖像世界に對する理解が薄れてきたものと考えられる。なお方銘盤龍鏡の銘には「九子家作兮」という例があり（古鏡今照・128），「九子」が製作者の屋號となっていたことを明確に示す。また各段の圖像を垂直方向にそろえて配するという大きな特色が，b・c 類で崩れてゆくのは，上中下という意識が弱くなったことを表すととらえられる。

これらの點において，四川から陝西への展開とともに，信仰集團から鏡製作が徐々に乖離していった狀況を讀み取ることができるかもしれない。ただし，三段の圖像區別は最後まで不變であり，華蓋・靈龜と母子，建木といった圖像世界を構成する基本要素には變化がない。

下段の圖像の變遷も單なる退化では說明できない。a 類では堯舜と二女の像が主體となるが，b・c 類では蒼頡ほかの人物が多くなってゆく。蒼頡と向かい合う像は沮誦と考えられる。銘文などの裏づけ材料がまだないが，楢山が說くように神農をふくむ可能性も高い（楢山 2012）。

五斗米道との關係を念頭に推測を進めるなら，蒼頡・神農も道敎とのつながりが考えられる。雙方とも道敎神の中に組込まれている。三段式神仙鏡の蒼頡は，布帛ないし竹簡に筆を執って文字を書き記す姿として描かれている。こうした圖像は當時の人々にとって，方士が符を記す姿と重なったのかもしれない。後漢代には鎭墓瓶など器物に呪文を記す風習が廣まり，五斗米道でも符が重視された。さまざまな聖帝の中で蒼頡が重

用された理由を求めることができる。同様に神農は，農具の發明により文明をもたらした帝王の一人であると同時に製藥と關係した帝でもあり（重澤 1953），道敎で重要な施藥に關わる神格とみることもできる。

圖像世界の廣がり　獨創的な圖像世界や信仰的な背景を有することが三段式神仙鏡の大きな特徵であるとするなら，他地域の鏡群への影響についても，そうした觀點から檢討する必要がある。

畫紋帶對置式神獸鏡の圖像は，三段式神仙鏡の圖像から母婦・九子像を省き，神仙を中心に組みかえた構成と理解できる。間に聖帝の圖像も挿入され，建木を表すものもあり，圖像の構成要素にも共通點が多い。ただし主體は西王母・東王父と靈獸であり，神仙世界が主題となる。

徐州系の畫紋帶同向式神獸鏡は，內區をおおむね三つに區切り，中段には西王母・東王父を置く。下段の中央の像は黃帝とされている。上段は伯牙・鍾子期であるが，音樂によって陰陽調和し，世界の調和と運行を司る意味があったと考えられる（西田 1968）。すなわち，上段：世界の運行を司るもの，中段：仙界，下段：人帝の世界という圖像構成の發想は三段式神仙鏡と共通する。東王父・西王母に龍虎座をともなうものがあり，華西系鏡群と密接な關係があった可能性がある。

系統間におけるこうした色々なレベルでの交流は，工人の移動や意匠の模倣にとどまらず，圖像世界とその背後にある信仰の傳播・影響によるところも大きいと考える。

結　　語

考古學的な檢討，道敎經典との對比による圖像解釋など，さまざまな側面からみて，華西系鏡群は五斗米道と深いつながりをもつ可能性があると考えた。參照した經典の年代の問題などがあり，斗母的な神格の登場時期が後漢末まで遡りうるかどうか，追求すべき課題は多々ある。現段階では假說として提示する。しかし考古學的な分析結果が示すように，本鏡群の生產は五斗米道と誕生・變遷・終焉の時を同じくし，地域的な動きも一致する。後漢末の四川・陝西において，五斗米道をふくめた，この地域の信仰・社會的な動向と深く關わった鏡群であることはまちがいない。

華西系鏡群と五斗米道との關係が密接であったとすれば，逆にこの鏡資料を用いて，不明な點の多い五斗米道の信仰の實態に接近する道が開かれる。五斗米道に關する史料では，先にも觸れたように，敎團組織や活動面に關する記述はあるものの，宗敎として何を信仰對象としていたのかという點については記載がとぼしい。北辰・北斗やそれを生み出した聖なる母への信仰が五斗米道に存在したとすれば，後の「道敎」とつながる

要素として，宗教史上の位置づけを考える材料ともなるだろう。

ただし信仰と銅鏡とが關連があったとしても，教團內での生產といった密着したものから，單に圖柄や銘文にその流行を取り入れたものまで色々な場合が想定される。また銅鏡は呪術などの目的に使用されることはあっても，信仰の中心對象となる器物ではありえない。そこに描かれた圖像世界も，崇拜對象を表すことはあっても，信仰の核となる對象や思想を示すとは限らない。斗母・北辰信仰と五斗米道の關連を想定できた場合も，その位置づけについては愼重に檢討してゆく必要がある。

以上の結果を次のようにまとめる。

・後漢後期，四川・陝西の地で，三段式神仙鏡を中心とし，方銘盤龍鏡・方銘獸紋鏡で構成される鏡群（華西系鏡群）が製作された。

・三段式神仙鏡は a～c 類に分類でき，2 世紀中葉～3 世紀前葉に位置づけられる。

・方銘盤龍鏡・方銘獸紋鏡は，三段式神仙鏡 b 類と平行する時期に位置づけられる。

・華西系鏡群の發祥は四川にあり，2 世紀後半の b 類の段階から陝西に生產の中心が移った。

・華西系鏡群の銘文や圖像は，江南の畫紋帶對置式神獸鏡にも影響を與えた。

・華西系鏡群の年代，製作地，生產の展開過程は，五斗米道の三張の活動年代，地域と重なる。

・三段式神仙鏡の上段の圖像は，斗母・天皇大帝・紫微大帝・北斗・華蓋・靈龜を表したものと說明することができ，北辰・北斗を中心とした星の世界を示すものととらえる。上段は天界，中段は仙界，下段は聖帝たちの人界を表現したものと理解する。

・斗母・天皇大帝・紫微大帝・北斗は「玉淸無上靈寶自然北斗本生眞經」など道教經典に登場する道教の重要な神格である。

・華西系鏡群は年代・地域展開・圖像內容からみて，五斗米道の動向と深く關係する鏡と想定する。

・年代や地域を確かめられる資料として，華西系鏡群は五斗米道の信仰內容・實態を究明する上でも重要な手がかりを提供する。

資料調査において，岡村秀典，王綱懷，陳佩芬，王牧，孔震，莊靜芬，廣川守の各氏にお世話になり，種々の御教示をたまわった。記して感謝申し上げます。

引用・参考文獻

池澤　優　2008 「後漢時代の鎭墓文と道教の上奏文の文章構成 ――『中國道教考古』の檢討を中心に」『兩漢儒教の新研究』，汲古書院，343-427 頁

上野祥史　2003 「盤龍鏡の諸系列」『國立歴史民俗博物館研究報告』第 100 集，國立歴史民俗博物館，1-23 頁

上野祥史　2005 「鏡の生產と流通からみた四川をめぐる地域間關係」『四川省における南方シルクロード（南傳佛教の道）の研究』シルクロード學研究 24，シルクロード學研究センター，107-118 頁

鵜島三壽　1991 「龍鈕を持つ鏡 ―― 大田南 2 號墳出土鏡を中心に ――」『京都府埋藏文化財論集』第 2 集，創立十周年記念誌，財團法人京都府埋藏文化財調査研究センター，63-72 頁

王　仲殊　1985 「吳縣，山陰和武昌 ―― 從銘文看三國時代吳的銅鏡產地」『考古』第 11 期，1025-1031 頁

大淵忍爾　1991 『初期の道教』，創文社

岡村秀典　1993 「後漢鏡の編年」『國立歴史民俗博物館研究報告』第 55 集，國立歴史民俗博物館，39-82 頁

岡村秀典　2011 「後漢鏡銘の研究」『東方學報』京都第 86 册，京都大學人文科學研究所，1-90 頁

小澤正人　1998 「搖錢樹からみた四川省と漢中・安康地區」『中國南北朝時代における小文化センターの研究』漢中・安康地區調査報告，筑波大學藝術學系，23-29 頁

何　志國　1991 「四川綿陽何家山一號東漢崖墓清理簡報」『文物』第 3 期，1-8 頁

何　志國　2007 「論漢代西王母圖像的两個系統」『民族藝術』1 期，93-108 頁

霍　巍　1999 「三段式神仙鏡とその相關問題についての研究 ―― その日中文化交涉史における位置づけを考える」『日本研究』第 19 集，國際日本文化研究センター，35-52 頁

霍　巍　2000 「四川何家山崖墓出土神獸鏡及相關問題研究」『考古』第 5 期，68-78 頁

卿　希泰　1980 『中國道教思想史綱』漢魏兩晉南北朝時期，四川人民出版社

卿　希泰（主編）　1988 『中國道教史』第 1 卷，四川人民出版社

卿　希泰（主編）　1994 『中國道教』1～4，知識出版社

邢　義田　2006 「陝西旬邑百子村壁畫墓的墓主，時代與「天門」問題」『故宮學術季刊』第 23 卷第 3 期，國立故宮博物院，1-38 頁

景安寧（Jing Anning）　2008 「銅鏡與早期道教」『道教美術新論』，山東美術出版社，3-10 頁

高　文（編）　1987 『四川漢代畫像磚』，上海人民美術出版社

高　文（編）　2011 『中國畫像石棺全集』，三晉出版社

小林太一郎　1938 「支那における訶利帝 ―― その信仰とその圖像とについて ――」『支那佛教史學』第 2 卷第 3 號，支那佛教史學會，1-48 頁

小林正美　1990 『六朝道教史研究』，創文社

小林正美　1998 『中國の道教』，創文社

小南一郎　1974 「西王母と七夕傳承」『東方學報』京都第 46 册，京都大學人文科學研究所，33-81 頁

小南一郎　1984 『中國の神話と物語り』，岩波書店

小南一郎　1994 「漢代の祖靈觀念」『東方學報』京都第 66 册，京都大學人文科學研究所，1-62 頁

齋藤龍一（編）　2009 『道教の美術』，讀賣新聞大阪本社・大阪市立美術館

酒井忠夫・福井文雅　1983 「道教とは何か」『道教』第 1 卷，平河出版社，3-29 頁

坂出祥伸　2005 『道教とはなにか』中公叢書，中央公論新社
坂出祥伸　2010 『日本と道教文化』角川選書 466，株式會社角川學藝出版
澤　章敏　2000 「道教教團の形成 ―― 五斗米道と太平道 ――」『道教の教團と儀禮』講座道教第 2 卷，雄山閣出版，12-33 頁
澤　章敏　2007 「五斗米道張魯政權の性格」『福井重雅先生古稀・退職記念論集　古代東アジアの社會と文化』，汲古書院，213-232 頁
重澤俊郎　1953 「神農傳說の分析」『東西學術研究所論叢』第 12，關西大學東西學術研究所，1-15 頁
四川省文化廳・四川省文物管理局　2009 『天府藏珍 ―― 四川館藏文物精華』，四川科學技術出版社
謝　明良　2009 「鬼子母在中國 ―― 從考古資料探索其圖像的起源與變遷 ――」『國立臺灣大學美術史研究集刊』第 27 期，國立臺灣大學美術史研究集刊編輯委員會，107-158 頁
周　蜀蓉　2008 「張魯北遷及五斗米道的發展與影響」『四川大學學報（哲學社會科學版）』第 5 期，65-73 頁
周　靜　2001 「漢晉時期西南地區有關西王母神話考古資料的類型及其特點」『四川大學考古專業創建四十周年暨　馮漢驥教授百年誕辰紀念文集』，四川大學出版社，376-391 頁
徐文彬・譚遙・龔延萬・王新南　1992 『四川漢代石闕』，文物出版社
昭　明　1995 「陝西鳳翔出土漢鏡擧要」『文博』第 3 期，94-104 頁
蕭　進銘　2011 「從星斗之母到慈悲救度女神 ―― 斗姆信仰源流考察」『道教神祇學術研討會論文集』Ⅳ，臺北保安宮出版，5-28 頁
蕭　登福　1997 「〈太上玄靈北斗本命延生眞經〉探述」『宗教學研究』，上：第 3 期　49-65 頁，下：第 4 期，30-39 頁
饒　宗頤　1956 『老子想爾注校牋』
饒　宗頤　1991 『老子想爾注校證』，上海古籍出版社
沈　仲常　1959 「四川昭化寶輪鎭南北朝時期的崖墓」『考古學報』第 2 期，109-126 頁
沈　曾植（錢仲聯編輯）　2009 『海日樓札叢』，上海古籍出版社
陝西省考古研究所　2003 『白鹿原漢墓』陝西省考古研究所田野發掘報告 23，三秦出版社
蘇　奎　2008a 「邛崍文管所藏“三段式神仙鏡”的圖像研究」『四川文物』第 4 期，60-65 頁
蘇　奎　2008b 「四川邛崍發現的三段式神仙銅鏡」『文物』第 7 期，91-92 頁
蘇　奎　2009 「銅鏡銘文“其師命長”的考察」『考古』第 3 期，64-72 頁
蘇　奎　2011 「邛崍三段式神仙鏡的銘文研究」『華夏考古』第 1 期，99-103 頁
曾昭燏・蔣寶庚・黎忠義 1956 『沂南古畫像石墓發掘報告』，南京博物院・山東省文物管理處
中國古鏡の研究班　2011a 「後漢鏡銘集釋」『東方學報』京都第 86 册，京都大學人文科學研究所，201-289 頁
中國古鏡の研究班　2011b 「三國西晉鏡銘集釋」『東方學報』京都第 86 册，京都大學人文科學研究所，291-333 頁
張　勛燎　1996 「東漢墓葬出土的解注器材料和天師道的起源」『道家文化研究』第 9 輯，上海古籍出版社，253-266 頁
張勛燎・白彬　2006 『中國道教考古』第 1 卷，線裝書局
張　澤洪　1988 「五斗米道命名的由來」『宗教學研究』第 4 期，12-17 頁
張　黎明　2009 「漢代的北斗信仰考」『北京科技大學學報』（社會科學版）第 25 卷第 2 期，122-126 頁
趙　邦彥　1931 「九子母攷」『國立中央研究院歷史語言研究所集刊』第 2 本第 3 分，261-274 頁

鄭　榮　1988 「城固縣文化館館藏銅鏡簡介」『考古與文物』第 4 期，95-97 頁
程林泉・張翔宇・張小麗・王久剛（編）　2009 『西安東漢墓』，文物出版社
德陽市文物考古研究所・什邡市文物保護管理所　2007 「四川什邡市虎頭山成漢至東晉時期崖墓群」『考古』第 10 期，20-28 頁
中村璋八・古藤友子・清水浩子　1998 『五行大義』新編漢文選 7・8，明治書院
楢山滿照　2005 「後漢式鏡地域様式論再説 ―― 後漢桓帝・靈帝代の四川製作鏡を手がかりに ――」『奈良美術研究』第 3 號，早稻田大學奈良美術研究所，161-181 頁
楢山滿照　2007 「後漢時代四川地域における「聖人」圖像の表現 ―― 三段式神仙鏡の圖像解釋をめぐって ――」『美術史』第 163 册，美術史學會，193-207 頁
楢山滿照　2012 「漢代畫像にみる聖帝像とその機能 ―― 館藏三段式神仙鏡を起點として ――」『早稻田大學會津八一記念博物館　研究紀要』第 13 號，51-66 頁
西田守夫　1968 「神獸鏡の圖像 ―― 白牙擧樂の銘文を中心として」『MUSEUM』No. 207，東京國立博物館，12-24 頁
西村俊範　1983 「雙頭龍紋鏡（位至三公鏡）の系譜」『史林』第 66 卷第 1 號，史學研究會，95-115 頁
任繼愈・鍾肇鵬（編）　1991 『道藏提要（第三次修訂）』，中國社會科學出版社
野口鐵郎・田中文雄（編）　2004 『道教の神々と祭り』あじあブックス 058，大修館書店
蜂屋邦夫（編著）　1995 『中國の道教 ―― その活動と道觀の現狀 ――』東京大學東洋文化研究所研究報告，汲古書院
林巳奈夫　1973 「漢鏡の圖柄二，三について」『東方學報』京都第 44 册，京都大學人文科學研究所，1-65 頁
林巳奈夫　1974 「漢代鬼神の世界」『東方學報』京都第 46 册，京都大學人文科學研究所，223-306 頁
林巳奈夫　1978 「漢鏡の圖柄二，三について（續）」『東方學報』京都第 50 册，京都大學人文科學研究所，57-74 頁
原田三壽　1997 「永康元年鏡の特徵とその製作背景」『立命館大學考古學論集』Ⅰ，立命館大學考古學論集刊行會，133-144 頁
樋口隆康　1953 「中國古鏡銘の類別的研究」『東方學』第 7 輯，東方學會，1-14 頁
樋口隆康　1979 『古鏡・古鏡圖錄』，新潮社
馮　時　2010 『中國天文考古學』當代中國學者代表作文庫，中國社會科學出版社
福永光司　1987 「昊天上帝と天皇大帝と元始天尊 ―― 儒教の最高神と道教の最高神」『道教思想史研究』，岩波書店，123-155 頁
聞　一多　1934 「天問釋天」『清華學報』第 9 卷第 4 期，國立清華大學，873-895 頁
聞　一多　1980 『天問疏證』，三聯書店出版
星川清孝　1961 『楚辭の研究』，養德社
星川清孝　1970 『楚辭』新釋漢文大系 34，明治書院
馬　咏鍾　1988 「陝西省博物館藏三國孫吳銅鏡」『文博』第 2 期，89-90 頁
增尾伸一郎・丸山宏（編）　2001 『道教の經典を讀む』あじあブックス 028，大修館書店
三浦國雄　2008 「道教の天 ――「初期天師道」における「天帝」を中心に」『兩漢儒教の新研究』，汲古書院，167-195 頁
宮川尙志　1964 『六朝史研究』宗教篇，平樂寺書店
巫　鴻　2000 「地域考古與對“五斗米道”美術傳統的重構」『漢唐之間的宗教藝術與考古』，文物出

版社，431-455 頁
巫　鴻　2005 「漢代道教美術試探」『禮儀中的美術』巫鴻中國古代美術史文編，三聯書店（原文 1989），455-484 頁
麥谷邦夫　1985 「『老子想爾注』について」『東方學報』京都第 57 册，京都大學人文科學研究所，75-107 頁
麥谷邦夫　2000 「道教與日本古代的北辰北斗信仰」『宗教學研究』第 3 期，32-38 頁
麥谷邦夫　2004 「天界の神々　星への信仰」『道教の神々と祭り』あじあブックス 058，大修館書店，22-27 頁
綿陽博物館　1990 「四川綿陽西山六朝崖墓」『考古』第 11 期，1024-1029 頁
森下章司　2007 「銅鏡生產の變容と交流」『考古學研究』第 54 卷第 2 號　考古學研究會，34-49 頁
森下章司　2011a 「漢末・三國西晉鏡の展開」『東方學報』京都第 86 册，京都大學人文科學研究所，91-138 頁
森下章司　2011b 「三段式神仙鏡の新解釋」『古文化談叢』第 66 集，九州古文化研究會，1-14 頁
安居香山・中村璋八　1978 『重修緯書集成』卷 6 河圖・洛書，明德出版社
安居香山・中村璋八　1988・1992 『重修緯書集成』卷 4 春秋，明德出版社
兪　偉超　1986 「序」『鄂城漢三國六朝銅鏡』，文物出版社，1-16 頁
游　國恩　1982 『天問纂義』，中華書局
羅　二虎　1988 「四川崖墓的初步研究」『考古學報』第 2 期，133-167 頁
李　淞　2000 『論漢代藝術中的西王母圖像』，湖南教育出版社
李　淞　2011a 「漢代銅鏡所見有關道教和神話的圖像」『學院美術』No. 1，湖北美術學院學報，8-11 頁
李　淞　2011b 「試論“三段式神像鏡”的圖像結構與主題」『陝西師範大學學報（哲學社會科學版）』第 6 期，120-125 頁
李巳生・王家祐（編）　1988 『中國美術全集』雕塑編 12 四川石窟雕塑，中國美術全集編集委員會
龍　晦　2003 「大足石刻中的明肅皇后，訶利帝母，九子母與送子觀音」『中華文化論壇』第 1 期，135-140 頁
劉　屹　2005 『敬天與崇道 —— 中古經教道教形成的思想史背景 ——』，中華書局
Bagley, Robert（ed.）2001, *Ancient Sichuan Treasures from a Lost Civilization,* Seattle Art Museum
Chou, Ju-hsi 2000, *Circles of Reflection The Carter Collection of Chinese Bronze Mirrors*, The Cleveland museum of Art
Little, Stephen and Eichman, Shawn 2000, *TAOISM and the Arts of China,* The Art Institute of Chicago
Schipper, Kristofer and Verellen, Franciscus（ed.）2004, *The Taoist Canon—A Historical Companion to the Daozang,* The University of Chicago Press
Seidel, Anna 1987, Traces of Han Religion In Funeral Texts Found in Tombs, 『道教と宗教文化』，平河出版社，21-57 頁

出典略號

歐米……梅原末治　1931 『歐米における支那古鏡』，刀江書院
開明堂……西村俊範　1994 『古鏡コレクション開明堂英華』，村上開明堂
鄂城……湖北省博物館・鄂州市博物館　1986『鄂城漢三國六朝銅鏡』，文物出版社
巖窟……梁上椿　1940～1942 『巖窟藏鏡』

奇觚……劉心源　1902 『奇觚室吉金文述』
紀年鏡圖說…梅原末治　1943 『漢三國六朝紀年鏡圖說』，桑名文星堂
車崎……車崎正彦　2002 「日本出土鏡（圖版掲載）銘文一覽」『考古資料大觀』第 5 巻　彌生・古墳時代鏡，小學館
故宮藏鏡……郭玉海　1996 『故宮藏鏡』，紫禁城出版社
古鏡……羅振玉　1916 『古鏡圖錄』
古鏡今照……浙江省博物館　2012 『古鏡今照』中國銅鏡研究會成員藏鏡精粹
五島……五島美術館學藝部（編）　1992 『前漢から元時代の紀年鏡』五島美術館展覽會圖錄 No. 113
四川……四川省博物館・重慶市博物館　1960 『四川省出土銅鏡』，文物出版社
上海……陳佩芬　1987 『上海博物館藏青銅鏡』，上海書畫出版社
小校……劉體智　1935 『小校經閣金文拓本』
西安……西安市文物保護考古所　2008 『西安文物精華　銅鏡』，世界圖書出版西安公司
西安東漢……程林泉・張翔宇・張小麗・王久剛（編）　2009 『西安東漢墓』，文物出版社
浙江修訂…王士倫（編）・王牧（修訂）　2006 『浙江出土銅鏡　修訂本』，文物出版社
陝西……陝西省文物管理委員會　1959 『陝西省出土銅鏡』，文物出版社
尊古齋…黃濬　1990 『尊古齋古鏡集景』，上海古籍出版社
長安……程林泉・韓國河　2002 『長安漢鏡』，陝西人民出版社
陳介祺…辛冠潔　2000 『陳介祺藏鏡』，文物出版社
桃陰……梅原末治（編）　1925 『桃陰廬和漢古鑑圖錄』
富岡……富岡謙藏　1920 『古鏡の研究』，丸善株式會社
服部……持田大輔（編）　2008 『服部コレクション　鏡の世界』，早稲田大學會津八一記念博物館
樋口……樋口隆康　1979 『古鏡』，新潮社
簠齋……陳介祺　1925 『簠齋藏鏡』
洛陽……洛陽博物館　1988 『洛陽出土銅鏡』，文物出版社
六安……安徽省文物考古研究所・六安市文物局（編）　2008 『六安出土銅鏡』，文物出版社
K……Karlgren, Bernhard 1934　Early Chinese Mirror Inscriptions, *Bulletin of Museum of Far Eastern Antiquities*, No. 6
Seattle……Bagley, Robert（ed.）2001,　*Ancient Sichuan Treasures from a Lost Civilization,* Seattle Art Museum

挿圖出典

圖 1-1：岡村秀典氏提供，1-2：Bagley（ed.）2001　p. 328，1-3：莊靜芬氏藏鏡，1-4：西安・60，1-5：上海博物館藏，1-6：昭 1995・圖 7-1
圖 2-1：岡村秀典氏提供，2-2・4：樋口・圖版 91 上，2-3：上海博物館藏
圖 3-1：樋口・圖版 91 上，3-2：莊靜芬氏藏鏡，3-3：西安・60，3-4：Chou2000　40
圖 4-1：古鏡・中・28 右，4-2：西安東漢・圖 129
圖 5-1：森下所藏拓本，5-2：邢 2006・圖 19，5-3：湖南省博物館 1981「湖南常德東漢墓」『考古學集刊』第 1 集，圖 9-6，5-4：尊古齋・77
圖 6：何 1991 より作成
圖 7：程ほか 2009 より作成
圖 8：森下作成
圖 9-1：王綱懷氏藏鏡，9-2：四川省文化廳・四川文物管理局 2009　165 頁，9-3：Seattle　p. 328，

9-4：高（編）1987　210・211

圖 10：森下作成

圖 11-1：劉雲濤 1999「山東莒縣雙合村漢墓」『文物』第 12 期　圖 4　11-2：傅借華（編）1950『漢代畫象全集』二編，巴黎大學北京漢學研究所　圖 21　11-3：李巳生・王家祐（編）1988　45